青の乙女と白髭

Dns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青の乙女と白髭

【Ｎコード】
Ｎ８１２４Ｙ

【作者名】
Ｄｎｓ

【あらすじ】
最終決戦の後消滅するはずだったアルフィミィはなんの因果かワンピースの世界へ。ｏｇ2からの分岐です。

1．終わりと始まりですの（前書き）

書いてしまいました。もういっこの方が滞っているのに。設定に関してはちょっと無茶なことも入ります。あとかなりキャラ崩壊がひどくなる予定です。広い心で見てください。

1．終わりと始まりですの

徐々に機体が燃えていくのを感じる。同時に崩壊も進む。どちらが先に私を殺すのか、できれば燃え尽きたほうが楽でいい。ほんの少しだけ共に戦った仲間たちに別れを告げたアルフィミィはそんなことを思っていた。ほかのアインストよりはよく持っているが死ぬのは時間の問題だろう。後悔はない、敵対した時からこの運命は覚悟していた。むしろ勝利に貢献できたし、仲間と認めてもらえた。あんなにひどいことをしたのに。それがうれしい、同時に悲しくもある。なぜなら、以前は知りえなかったことを理解してしまったから。だから、

「家族、ほしかったですの」

そう、あの仲間たちの中に家族のために戦う人がいた。家族、システムとしての群体ではなく、絆に元ずく集合。それは、とても眩しくて、うらやましかった。特に私は極めて人間に近い。だからアインストの中でも特に孤独だった。もっともほかのアインストには個がないが。仲間よりも深い、そんな絆。ないものねだりなのはわかってる。人ではない私に家族はいない。同族は全て滅んだ。本当にたったの一人、ふと仲間たちが私の死を悼んでいるのを感じる。うれしい、けれどやっぱりどこかさみしい。言い方は悪いが結局は近しい他人。そう思うと、みんながうらやましい。だってみんなには家族がいる。私にはいない。だから、だから少しだけ願った。家族がほしいと。奇跡の勝利を得たのだから、この位かなってはくれないのだろうか。そんなことを思った。そこで私の意識は消えた。

何故か消える瞬間、ペルゼインが笑った気がした。

ふと気が付くと、どこかに寝転がっているようだ。死後の世界、そんなことが頭によぎる。一応知識ではもっていた、人間の妄想だが。だけど、ここはひどく寝ごごちが悪い。いや、むしろ痛い？そう思った瞬間目を開ける。広がったのは一面の青い海と空。どうやら私は岩場で寝ていたらしい。道理で寝心地が悪いわけだ。

「というか、ここどこですの？」

疑問を口に出すが当然誰も答えない。あの時、間違いなく私は滅んだはず。ただ死ぬのではなく、チリひとつ残さず消える。それが私の終わりだったはず。なのに今生きている。呼吸が、鼓動が、私は生きていると証明する。ふと気づくと手には鬼蓮華が‐ご丁寧にも人間向きのサイズで‐握られていた。

「ますます意味不明ですの」

さすがに鬼菩薩はないが、身を守るには十分である。どころか、

「念動力に、これは超感覚？なんでこんなもの使えるんですの？」

持っていなかったはずの力、特に念動力は自分を浮かせ、さらには

短距離テレポートまでできる。ためしたらあっさりできた。当然のようにマブイダチも放てる。実際放ったら轟音と共に海が割れた。ぶっちゃけ無茶苦茶である。リオンぐらいなら一人で倒せそうである。

「この力は、もしかしてペルゼイン？」

かつての自らの愛機、否、半身に思いを馳せる。理屈の通った説明は出来ない。でもこの命は彼に与えられた、そんな気がするのだ。

「だったら、きちんと生を全うしませんとね」

でもさすがにオーバーキルな気もする。改めてこの世界のことを考えるとそう思うのだ。だって機動兵器どころか、飛行機ですらさっきから見あたらないのだ。超感覚もそう言っている。ならばこの世界は人間サイズが基本である。

「まぁ、あって困るものでもありませんし」

ここまで思考をまとめて気づく。すぐそばに人がいると。そこで驚いてしまう。まだきちんと調べたわけではないが半径1キロぐらいにいる人間に気付かなかったのだ。かなりの達人、しかも明らかに警戒している。でなければ気配を消しはしないだろう。とにかく声をかけてみる。

「誰、ですの？」

ずんっと音がしそうな巨体が現れた。前言撤回、鬼菩薩が欲しい。自分が言うのもなんだが、人間なのだろうか。目の前の男は巨人というにふさわしい、否むしろ魔人だろうか。そういえば女の子の姿をしたロボットがいたなぁ、と軽く現実逃避。頭にはバンダナがまかれている。顔つきからして三十代前後だろう。・・・多分。上に来ているチョッキが明らかにサイズがあっていない。つーか今すぐはちきれそうだ。

「オメェさん、何もんだ？」

考えていたら質問が帰ってくる。

「質問に質問は失礼ではありませんの？」

「あぁ、そうだな」

男は頭を掻く。意外と話は通じる？
「俺ぁ、エドワード・ニューゲート。海賊だ。つっても独立したてで一人だが」
えーと、かいぞく？世間自らずな私でも、それがいかに時代錯誤な言葉かはわかる。というか、この人私は犯罪者ですって言っている。いきなり不安だ。
「私は、アルフィミィと申しますの」
内心を悟られぬように務めて冷静に答える。
「アルフィミィか、良い名だな」
基準がわからない。社交辞令なんだろうか。そっちの名前は何というか。前半はともかく後半はとんでもない。ニューゲートて、人名に使っていいいのだろうか。
「そちらはなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」
「エドワードでもエドでも好きに呼べばいい、それでだ」
なんだろうか。
「とりあえずここじゃなんだから、少し奥にいかねえか、快適な場所とは言えねぇがここよりはましなはずだ」
これは、まさか、しかし
「ん？どした？」
「奥で何をしますの？」
「いや少し話を聞こうかと」
「にかこつけて私にアレやコレやするつもりですのね」
「はぁ？」
「しかも、私みたいな体型の幼女を、そうか、これがロリコンなのですね」
「ちげぇ！！つーか普通は売られるかの心配するだろうが」
「な、なんてど外道なんですの」
「しねぇよ、ってか話が飛躍しすぎだ。オメェにゃそんなこと感じねぇよ」
「つまり・・・」

「なんだ」
「童貞、童貞ですのね」
「なぜそうなる！！」
「好みの女性を前にして行動にでられない、噂に聞く童貞の行動ですの」
「そもそも何でロリコンがそのままなんだ、俺はもっと大人の女が好みだ」
「変態は皆そういういうそうですの」
「ひどくなってる！？」
「変態で童貞、救いようがないですの」
「どっちもねぇよ！！童貞なんて１５の時に捨てたわ！！」
「つまり経験済みの変態」
「変態じゃねぇ！！人の話を聞けぇ！！」
「嫌ですの」
「即答！？ってか途中からわざとだろ」
「違いますの」
「何？」
「最初からに決まってますの」
「ふざけんな！！！！」
「ふざけてます！！！」
「な」
たしか、エクセレンはこんな感じで話していたと思う。やってみてわかるのだが、楽しい。
「くそ、なんなんだオメェは」
「アルフィミィですの」

後に世界最強の親娘と言われることになる二人。そんな二人の出会

いはちっとも運命的ではなかった。

はじめての〇〇ですの（前書き）

ほぼ一ヶ月ぶりの更新です、年末は暇なのでもう少し多く更新する予定です。

はじめての〇〇ですの

「えーと、東西南北の海と大陸あとは島ばっかりと」
「そうだ」
「…ふざけてますの？」
とりあえず異世界っぽいのでエドにいろいろ聞いてみたのだが、地理からぶっ飛んでいた。平行世界というものがあるのだから今までの常識（知識しか無いけど）が通じないのは覚悟していた。けどちょっと無茶苦茶じゃなかろうか。どんなことがおこればそうなるのかさっぱりである。しかも極めつけが、
「偉大なる航路、ですか」
世界を一周する航路、その両脇には無風の海域にして超巨大生物の巣窟、凪の帯。偉大なる航路も全く一貫性のない天気、方位磁針が通じない危険航路。どっちかって言うと魔の航路とかそんな名前が似合いそうな感じがする。で、今いるのが。
「まさに偉大なる航路ってわけだ」
「ドヤ顔やめてください」
自慢げに言うな。えーと一生懸命生きようって思っていましたけど、いきなりなんですかこれは。キョウスケでもこんな賭けはしませんよ。
「ドヤ顔ってなんだよ」
「さっきみたいな顔ですの」
エドは人の気も知らないでのんきだ。
「でだ、こっちも聞きたいことがある」
きた、私が何者か、それを聞こうとしているのだろう。さっきも訪ねてきていたし。
「おめえさん、親はいるかい？」
「はぁ？」
えーと、っちょっと素になってしまった。今このおっさんはなん

て言った？
「今なんて」
「だから親御さん入るのかって聞いたんだ」
「いや普通そこじゃなくて私が何者か聞くもんじゃありませんの！？」
　自分で言うのもなんだが、怪しさ満点な私に何も聞かないのはちょっと無用心すぎないか？
「ん？ああ今まで聞いてきたことからオメエさんはどっか遠いとこか来たってのはわかったからな。それだけ聞けりゃ十分よ」
「なぜ、ですの？」
「オメエさんは、よくわかってねぇんだろ？」
図星、まさにそうだ。説明できる訳がない。なにせ自分のことがよくわからないのだ。ペルゼインがくれた命だということ以外何一つ。知識と体は一人前だが心が伴っていない。しかも知識は世界が違うせいでほとんど役に立たない。こんな状態で何を説明するつもりだったのだろうか。
「それにだ、女の秘密をのぞく趣味はねぇしな」
にやっと笑ったその顔はちょっとかっこよかった。
「変態のくせに」
精一杯の罵倒、あぁこれが照れ隠しなのか。
「まだ言うか。ま、それはともかくさっきの質問に戻ろうじゃねぇか」
「親、ですか」
これまた難しい。だって私は親を殺したのだ。いやまぁあれをお父さんもしくはお母さんと呼ぶのは難しいが。ここはまぁはぐらかしておくか。
「いませんの、ちなみに家族も」
　家族と口にだし、ふと思うやっぱりさみしいと。
「そうか、やっぱりな」
「やっぱり？」

「さっき見たときどうも寂しそうな目ぇしてたからな、それも離れたんじゃなくていないって再確認したときみてぇな」
どんな目だ。すごい観察力だよこの人。でも事実だ。私には待ってくれる人がいない。せいぜい向こうで葬式でもしてくれるくらいだろうか?それも怪しいけど。
「それでだ、提案っていうか、勧誘っていうか」
「なんですの」
さっきまで、の態度とは一変なんか恥ずかしそうに言っている。ぶっちゃけキモイ。
「うん、キモイですの」
「ひどくね!?」
「いや、その体のサイズで恥ずかしそうにくねくねされると背中がゾクッとしますの」
「それでも口に出していうか?」
「いいましたの」
はぁーとため息をつかれた。でも、言っとかないといけないそんな気がしますの。
「まぁなんだ、話を戻すとだな、…俺の娘にならねぇか?」
「…やっぱり」
「ん?どういうことだ?」
「やはりあなたは・・・ド変態でしたのね」
「だからなぜそうなる!?」
「血の繋がらない親娘同士で、アレやコレをする。もはや救いようがありませんの」
「そんなつもりは一ミリもねぇよ」
「じゃあ私は魅力がないと」
「別にそういうわけではって泣いてる!?」
「ひどいですの、女性に向かってそんなことが言えるなんて」
「一言も言ってねぇ、つーかむしろ可愛いだろオメエは」
「…本音が出ましたのね、やはり変態ロリペド野郎ですの」

「嘘泣きかテメエ!!つうか俺の好みはオメエみたいなチンチクリンじゃねえ!!」
「チチクリ…」
「言わせねぇよ!!」
「…ッチ」
「わざとだったんだな」
「まぁ冗談はさておき」
「いきなり戻んなよ」
「このままだと話は平行線ですのよ」
「誰のせいだ!!」
「私のせいですの!!」
「無い胸張って言うな!!」
「んなっ!!気にしていることを!!」
「たまにはやり返してやるさ」
「エドのくせになまいきですの」
「はっ、悔しかったら胸を大きくしてみやがれ!!」
「もういいですの、ちょっと本気で泣きそうですの」
「あ、スマン」
なんて、何て締まらない会話なんだろう。なのに、なんでこんなに楽しいのだろう。これが、私の求めていたものかな?
「…」
「…」
「始めに言っておきたいですの、この話を聞いてそのまま立ち去っても構いませんの」
「いきなりなんだ?」
「もしもそうなるのだとしたら嘘は付きたくないですの」
そこから私は話し出した。私がなにもので何をしてきたのか。もちろん、あの親殺しも。
「ひとつ聞きてぇ」
話終えて返ってきたのはそんな一言だった。

「なんですの」
「オメエさんは、その親を愛していたか？」
「それは間違いなく否ですの」
それは間違いない。そもそも愛された覚えもない。
「…そうか、だったら俺は愛される親父を目指してやる」
「いいですの？」
「当然だ、オレぁなはぐれもんで家族を作ろうって思ってんだ。愛してもらえなきゃ家族どころかあっという間に敵だ」
「もしも、家族から敵になったら？」
我ながら意地の悪い質問だ。
「そんときは素直に刺されるさ、わるいのはオレだからな」
器が大きい、そう思えた。この人は見栄だとか誇張じゃない本当にその覚悟をもっている。
「オレァなオヤジになるってことはそうなんだと思っている」
と豪快に笑っていった。クスっと笑ってしまった。
「さっきのキモイオッサンと同一人物とは思えませんの」
軽口と共に、
「あーあれは忘れてくれ、二度としねぇ。…それでだ、返事はどうなんだ？」
「催促だなんて野暮ですのね」
「うるせえ、気になるんだよ」
「もちろん、娘にさせて欲しいですの」
「本当か？」
「マジですのよ」
エドはその一言で嬉しそうに手を握り締めた。
「これで一人目だ、こっから始まるんだな」
「そういえば父上」
「なんだ、ってなんて呼びゃいいんだ？」
「アルフィミィでいいですのよ。間違ってもアルって呼ぶのは許しませんけど」

「了解だ、でなんだ？」
「いえ私たちは海賊になるんですよね？」
「まぁそうだな」
「その一味の名前は？」
「まだ二人だけで一味ってのもなんだけどな。白ひげ海賊団って名乗るつもりだ」
「…えーともしかしてそ無精髭は」
確かに白いけど、
「あぁこいつはまだ未完成だ、最終的にはだな」
そういい取り出したのは不敵な笑いに三日月のようなヒゲをつけた、ドクロマークだった。
「こうなる予定だ」
「これって人間のヒゲですの？」
「当たり前だ」

のちの最強の親娘はこうして家族の契を結んだ。出会いは運命的ではなかったが今この瞬間は運命を感じる二人だった。

はじめての〇〇ですの（後書き）

感想、意見まってます

誓いを立てるですの（前書き）

今回は残酷描写なうえにコメディー色が薄いです。苦手な方はブラウザバックを

誓いを立てるですの

「とまあいい感じの話にはなりましたけど、これからどうしますの？」
「んーとりあえず、家族集めってとこだな。さすがに二人じゃカッコがつかん」
そう言われてふと疑問がわく
「父上は今までどうしていましたの？」
「一応海賊団で船員やってたんだけどな、喧嘩して別れた」
…なぜだか嫌な予感がする。こう何というか、フラグっぽいような。そう思っていたら、
「父上、ものすごい殺気が近づいているんですけど」
「んん？あいつらあのくらいで怒んなや」
いやいや、ちょっと洒落にならない殺気が近づいているんだけど。
「ちなみに何をしましたの？」
「全員海にたたき落としてお宝全部と食料を八割、あと小舟を一隻もらってった」
うん、絶対怒る。つーかブチギレる。それって喧嘩ですか？
「何言ってやがる、命と食料は置いてったんだ。ありがたく思えってんだ」
「父上はそんなことやられて平気ですの？」
「なわけねぇだろ」
あぁ、分かってやってるんだ。すごいいい笑顔で言ってる。まぁいいか、
「じゃあ、初の共同作業ですのね」
「親娘としてな」
海岸から声が聞こえる。罵声、怒声、金切り声。うん、間違いない
「雑魚ですのね」
「おいおい、偉大なる航路の海賊を雑魚呼ばわりかよ」

「ええ、だって」
「だって？」
「品がありませんの」
そう言い鬼蓮華を抜く。父上はそれを見てほうと感心する。ちょっと嬉しい。
「そいつは業物か？」
「いいえ、私自身、ですの」
しゃらんと鳴る。さてはじめよう
「戦闘開始、だな」
「蹂躙の間違いですのよ」
「そうだな」
父上は豪快に笑った。その手には、鉄塊と言ってもいいような青龍刀を握り。龍虎王のよりかっこいいと思った。
それじゃあ、蹂躙を始めましょう。

「エドワードのやろうどこにいやがる」
船員の一人が言う、明らかに苛立っている。正直、奪われたのは腹が立ちはしねぇ。俺たちは海賊だ。奪い奪われ、ならば最低限のプライドとして奪われる覚悟はしている。だからエドに殺されても文

句はなかった。だがだ、
「舐めやがって」
情けをかけられた。こう見えても５０００万を超えた一端の海賊だ。その額には誇りをもっている。はみ出しものだからこそ、そこだけは守る。だが、泥を塗られた。あいつと戦って生きていられるのは本来奇跡だ。船長をやれたのはあいつが断ったからだし、みのがしてもらったのは運がいいと誰もが自覚している。しかしだ、あんな理由でプライドをずたずたにされるのは勘弁ならねぇ。だから殺る、たとえ刺し違えてもこのままじゃ収まらねぇ。

ヒュンっと風がなった。そして轟音と共に地面と海が割れた。船員が斬られている。そして、ズルリと俺の視界がずれた。

「船長がやられたァァァ！！！」
マブイダチで一番立派な格好をしているのを斬ったが、どうやら船長だったようだ。
「おいおいいきなりかよ」
「当たり前ですの、か弱い私が斬り合いなんて出来るわけありませんの」
「嘘付け」
軽口のやり取り、我ながらさっき家族になった同士とは思えないほど自然なやり取り。そして思う、私たちは家族になれたのだと。意外とあっさりてにはいってしまった。
「俺もやるか」
短い一言共に父上が腕に力を込める。握られた青龍刀の先に歪みが

見える。《グラグラの実》、振動を操る能力、父上いわくまだ上手く制御できていないらしい。その父上は青龍刀を振るった。衝撃波が相手を襲う。轟音とともに船員が吹き飛ばされる。時折、いや多くの相手から断末魔の悲鳴が聞こえる。何人かは生き残ったようだ。生きてももはや立つのも困難なようだが。その中の一人が叫ぶ。

「テメエ、なんで裏切った!?」

「うらぎるだぁ?はじめに裏切ったのはてめえらだろうが」

「俺たちは海賊だぞ、あれのどこが悪い!!」

「海賊だからしちゃあいかんだろ、アホンダラ」

彼らがしたことは簡単には聞いた。正直、そのことに関しては相手の自業自得だろう。約束を破ったのだから

「奴隷なんてのはな自由を愛する海賊が一番憎むもんなんだよ!!」

そう、奴隷のための人さらい、父上はそれが許せなかった。しないと言われたから仲間になったのに。

「テメ・・・」

そこで私はそいつの首に刃を突きつけた。

「もういいですのよ」

にこりと微笑みながら、

「いいって、どういうことだよ」

声が震えている、でもどうでもいい。

「あなたがたがどういう考えでそうなったのかは知りませんのけど」

そう言い、すっと刃を引く

「父上を裏切った、それだけであなたがたは重罪ですの」

鮮血が舞った。

「大丈夫か?」

「なにが、ですの？」
「オメエさんこういう戦いは初めてだろう？」
「そうですの、でも」
「でも？」
「人を殺すのに大差はありませんの、機械越しでも、直接でも」
嘘偽わりない本音、この程度でどうこうなるようなやわな私ではない。
「そうか」
父上は一言、でもそこに感じたのは気遣いだった。血まみれの砂浜、でもそこに親子の絆を感じていた。私たちは共二血に汚れると。それが、私たちの家族のあり方だと。ポフッと父上にもたれかかる。
「暖かいですの」
「好きなでだけそうしてろ」
少し疲れた、そんな時に支えてくれる人がいる。だから私は、強くなろう。もっと向き合えるように、そして支えられるように。

誓いを立てるですの（後書き）

意見感想まってます。批判でもオッケーです。というかさみしいです。プリーズ感想。

弟候補発見？ですの（前書き）

今年最後の更新です。今回ちょっぴり銀魂風味です

弟候補発見？ですの

「これはどういうことですの？」
目の前にいるのは、炎に包まれた少年。しかし、その目には絶望はなかった。あるのは敵対心、反抗ｓ、憎悪そんなものが渦巻いている。しかし私を見ると、
「ガキにやられてたまるかヨイ！！」
殴った、鬼蓮華で。

海賊を殲滅したあと、船に行くことにした。というのも、
「まぁ、ちょうど良く船壊れてたしなぁ」
「先に言えですの」
という訳で、かわりの船がいるのだ。さすがに、無人島で二人っきりというのはカンベンですの、っていうか無計画すぎますの、馬鹿ですの？死にますの？」
「声に出てんぞ」
「失礼、言いたかったですの」
ネタ的に、
で、船に行くと、何かおかしな感じがした。何というか、人の気配なのにずれてる感じがするのだ。というか、自分の能力なのにいまいち使い切れてない。
「要特訓、ですのね」
「どうした？」
「何でもありませんの、それより下に誰かいますの」
「全員殺ったはずだが？」
「んー、違いますのね。何というか弱ってる感じがしますの」
そう、弱々しいのだ、今にも死にそうというよりも、もともと大し

たことがない？
「ここ、ですのね」
それは巧妙に隠された扉だった。
「ここまで手の込んだ事しやがって」
裏切りはかなり前から行われていたのか。父上に知られないようにしていたようだ。もうちょっと、いたぶったほうがよかった。
「いや、やりすぎだろそれは」
「な、父上が優しいこと言ってますの」
「…そんなに驚くことか？」
「この船沈みますの！！！」
「なわけあるかぁ！！」
「まぁそうですのね」
「あっさりしすぎだ」
そんな馬鹿なことやっていたら、父上が扉を開ける。なかにはトサカ頭の少年がいた。
「誰ヨイ？」
ヨイって、ちょっとあざとすぎではなかろうか？
「俺はエドワード、こっちは娘のアルフィミィだ」
父上律儀だ。まぁいいや、
「あなたは、誰ですの？」
「海賊じゃねえのかヨイ？」
かなり切羽詰ってるのか、質問を聞いていないみたいだ。
「海賊だ」
って父上、それはまずいのでは
「クソっ」
そう言い、少年の体が青い炎に包まれる。

「で、気絶しちまったわけだが」
見事に白目を剥いていた。

「ガキ相手にやりすぎじゃねぇか？」
「レディにガキと呼んだ罪は重いですの」
特に、こいつは胸を見ていった。大人なら強制去勢拳でやってましたの。
「あいたた、なんだヨイ」
復活が早い、どうでもいいけど能力者らしい。
「あ、てめぇなんてこ・・と」
言葉が止まる、いったいどうしたのだろう。
「あーさっき止めろ、下手すっと下の奴らに向けたのよりこえぇぞ」
あら、これは失敗。少年はガタガタ震えている。
「すみませんの、父上が怖がらせてしまいましたの」
「って俺のせい？」
「当然、子の罪はすべて親が悪いですの」
「無茶苦茶だ！！」
「そんな、私のことは遊びでしたの？」
「なんで崩れ落ちる、ってそこのガキもドン引きの目ぇすんな！！」

訳が分からねぇヨイ。この二人は海賊って言った。海賊、それに俺はさらわれた。奴隷にされるため。能力者だはあるものの、自分の力は大したことがない。そもそもうまくコントロールもできてねぇヨイ。だから捕まった、今は静かにもなりどうに枷も外せた。けれども、状況が分からねぇ。だから、食物だけもらって、隠れていた。後で思うと、さっさと逃げれたのにどうしてそんなことをしなかったのかわからねぇ。とにかくだ、元の部屋で隠れていたらデケェおっさんと幼女もとい美少女が入ってきた。で、女をガキと呼んだら意識を失い。起きてみてしばらく話すと、二人でコントを始めた。おっさんに言わせると俺はドン引きの目をしてるらしい。いや、単

に話について言ってないだけだから。ただ、親兄弟のいない俺はよくわからないけど。これが親娘ってもんなんだろうか？
うん、完全に混乱してる。なにせさっきからヨイって言ってない。

「で、オメエさん親兄弟はいるのかい？」
あー定型文ですの、私も言われたし。多分居ないんでしょうねぇ。父上の勘はすごいから。
「い、いねェヨイ。それがどうかしたのかヨイ」
少年も律儀です。
「オメェさん、俺の息子にならねぇか？」
うん、前より堂々としている。上出来です。
「っていきなりなんだよ、つーかまだ名乗ってすらねぇ奴なんで息子にすんだよ！！」
「「あ、忘れてた」」
「ハモるなぁ！！！！」
「素晴らしいですの」
「なんで褒める！？」
「私の面白玩具にピッタリですの」
「いま、すっげ嫌なことが聞こえた気がするヨイ」
「そうだ、生贄羊になってくれねぇか？」
「おいぃぃぃ、絶対なんかおかしいヨイ！！」
「まぁ、冗談はさておき、いままであなたを縛っていたゲスはみんなこの世からお別れしてもらいましたの」
「だから、どっちでも構わねぇ。嫌だってなら近くの島までは送ってやる」
「いや、あんたら海賊だろ？」
「海賊だからだ」

「訳がわかんねぇ」
「ま、すぐに結論を出す必要はねぇ」
「そうですのね、とりあえず近くの島にはいけますしね」
「…とりあえず、仲間じゃダメなのか？」
「構わねぇぞ」
「あっさり！？」
「そのうち気が変わったら家族の契を交わしてくれりゃいい」
「えーと、とりあえずなのらせてくれねぇ？」
「そ～いえば、忘れてましたの」
「忘れんなぁ！！そして俺はマルコだヨイ！！」
「よろしくですの、マルコ、いつか面白玩具（おとうと）と呼びたいですの」
「絶対弟の字違うヨイ」

弟候補発見？ですの（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。
良いお年を

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8124y/

青の乙女と白髭

2011年12月31日22時50分発行